

# 教員養成における授業改善の試み

田中理絵・鷹岡 亮・岡村吉永・西村正登・友定保博・杉山 緑

Improvement of Instruction on Teacher Education

Rie TANAKA, Ryo TAKAOKA, Yoshihisa OKAMURA, Masato NISHIMURA,  
Yasuhiro TOMOSADA & Ryoku SUGIYAMA

(Received September 30, 2005)

## 1. はじめに

本稿は、平成17年度・前期に実施した教職必修科目「教職概論」(1年次)のうち、学校教育教員養成課程学生対象クラス(以下、養成系学生クラス)の授業に関する報告である。

これまでの「教職概論」の授業では、附属学校教員及び附属学校校長経験者による授業などを部分的に取り入れることもあったが、基本的には、学部教員による講義を中心として進められてきた。しかし、近年の教員養成段階における「実践力の育成」や「体験的学習の導入」の強調などから、講義中心のスタイルからの転換を図る必要性も出てきた。そこで、「教職概論」の授業2クラスのうち、養成系学生対象クラスにおいて、授業を再構成し、現職教員あるいは元公立学校長等を招いて、実践の事実に基づく授業(講義)や現職教員と受講学生とのグループ座談会等を取り入れた実際的で、参加型・体験型学習による授業を試みることにした。

なお、この試みは、「大学・大学院における教員養成推進プログラム(教員養成GP)」の申請に向けた先行的・試行的取り組みとして位置づけられたものである。

## 2. 授業の計画と運営

### (1) 授業運営スタッフ

授業は、副学部長を中心とする6名の運営担当スタッフによって計画・運営された。メンバーは以下の通りである。

- ・友定保博(プロジェクト長・副学部長)
- ・田中理絵(人間教育学教室)
- ・鷹岡 亮(教育実践総合センター)
- ・岡村吉永(技術教育教室)
- ・西村正登(人間教育学教室)
- ・杉山 緑(人間教育学教室)

### (2) 授業の目標と計画

授業計画の作成に際して、以下の点を踏まえることとした。

- ① 平成9年の教養審第一次答申及びそれに伴う免許法の改正趣旨等を踏まえ、本授業は教職入門科目とする。
- ② 近年の教員養成に対する要請をも考慮し、学生参加型・体験型学習を取り入れる。
- ③ 単に教職への実践的導入ばかりでなく、進路選択・決定についての手がかりをも与える授業とする。

そして授業の目標を以下のように設定した。

- ① 学校教師を目指す学生に、教職とは何か、その魅力ややりがいなどを現職教員の体験談なども交えて理解させ、教職への希望、意欲、志向性などを育む。
- ② 同時に、教職についての基礎的知識・認識を獲得させる。

さらに、上記の目標に即して、全13回の授業計画を作成した。各回の講義テーマ等は以下の通りである。(括弧内は担当者。また、スタッフ教員は授業運営スタッフ教員を指す。)

- 第1回：オリエンテーション (スタッフ教員)
- 第2回：いま、教師に求められていること (スタッフ教員)
- 第3回：現代の子どもと学校・家庭・地域 (スタッフ教員)
- 第4回：教師の実際1 授業づくり (公立学校教員)
- 第5回：教師の実際2 学級指導・生徒指導 (公立学校教員)
- 第6回：教師の実際3 学校運営・管理 (学部教員)
- 第7回：グループディスカッション：教師のしごとと私たちの課題 (全スタッフ教員)
- 第8回：学校教師と語る (座談会) その1 (附属教員及び現職院生)
- 第9回：学校教師と語る (座談会) その2 (附属教員及び現職院生)
- 第10回：座談会のまとめ・グループ発表 (全スタッフ教員)
- 第11回：教育実習で何を学ぶか・体験者と語る (教育実習部教員・4年生)
- 第12回：教員になるための準備・計画 (スタッフ教員)
- 第13回：教育学部の臨床体験プログラム (スタッフ教員)

### (3) 自己評価と感想及び振り返りシート

学生が授業をどの程度受け止め、理解し得たかを見るために、毎回簡単な自己評価を行わせると同時に感想を書かせた。(毎回授業終了時に提出)

また、授業を振り返り、以後の学習の目当てや自己の学習課題等を確認させるために、「振り返りシート」を準備した。(最終レポートとともに提出させた。)

### (4) アンケート調査

本授業の効果を見るために、第1回授業及び最終授業時に簡単なアンケート調査を実施した。

## 3. 授業の概要

次に、実際に行った各授業の概要を示す。

- ① 第1回：第1回授業は、スタッフ教員が担当し、オリエンテーションとして本講義の位置づけ、授業計画、担当者、評価法等について説明した。また、毎回提出させる「自己評価票・授業の感想」、「振り返りシート」等の扱い、さらに、本授業のみでなく今後の学習を進めていくための心構え等についても講義した。
- ② 第2回：スタッフ教員が担当し、平成9年の教養審第一次答申を題材に、今日の教員に求められる資質とは何かについて概説した。続いて、山口大学教育学部における教職カリキュラムの概要について説明した。

- ③ 第3回：スタッフ教員が担当し、現代の子どもの実態と学校・家庭・地域とのかかわりや学校が抱えている課題等について、近年の各種調査データ等を基に概説した。
- ④ 第4回：公立学校教員を講師に招き、道徳授業を例にして授業づくりの手法ならびにその際に教師が考慮・工夫する事項等について具体的事例を基に概説した。
- ⑤ 第5回：第4回と同様に公立学校教員を講師として、学級指導・生徒指導の実際について具体的事例を基に概説した。
- ⑥ 第6回：担当は本学部教員であるが、元公立中学校長経験を踏まえ、学校の管理・運営、校務分掌等について具体的事例を基に概説した。また、教職を目指した動機や新人教諭時代の体験談についても紹介した。
- ⑦ 第7回：受講生を10のグループ（1グループ13人前後）に分け、「教師のしごとと私たちの課題」と題して、これまでの授業を振り返り、考えたこと、見えてきた課題等についてグループディスカッションを行った。また、第8、9回と2回にかけて行う現職教員を招いての座談会のために、現職教員への質問等を考えることも指示した。
- また、各グループに互選による進行係・記録係を置き、授業の最後に20分ほど時間をとって各グループのまとめを行い、提出させた。（なお、グループのまとめはコピーして座談会担当の現職教員等に事前に配布した。）
- ⑧ 第8回：「学校教師と語る」と題し、附属学校教員3名、現職院生7名の計10名の現職教員を講師として前回授業のグループを利用して座談会を実施した。
- また、最後にまとめの時間を取り、各グループの座談会での質問事項や学んだこと等について整理させ、提出させた。
- なお、第2回目（第9回授業）座談会では担当講師が9名となるため、希望校種毎にグループを再編成することとし、調査票に記入・提出させた。
- ⑨ 第9回：前回に引き続き、附属学校教員5名、現職院生4名の計9名の現職教員を迎えて座談会を実施した。グループは9グループ編成で、小学校4グループ、中学校3グループ、幼稚園1グループ、養護学校1グループである。
- 最後にまとめの時間を取り、次回（第10回）授業でのグループ発表の準備をさせた。
- ⑩ 第10回：2回の座談会で学んだ成果について、第2回目座談会グループによる発表会を行った。代表による発表をはじめ、全員による発表、模造紙を準備しての発表、寸劇風に構成しての発表等、各グループの工夫が見られた。
- ⑪ 第11回：まず、「教育実習で何を学ぶか」をテーマにして、教育実習部担当教員により、教育実習のあらましや心構え等について、Power Point等を使用して概説した。
- 続いて、学部4年生・院生の協力の下に、実習体験者との懇談会（Q & A方式）を行った。
- 4年生・院生との懇談会では、第2回及びグループ発表時のグループを利用した。
- ⑫ 第12回：スタッフ教員が担当し、まず、教員になるための関門となる近年の教員採用試験の概要、試験の内容、傾向、採用状況等について資料に基づいて概説した。
- 続いて、本学部における教員採用試験及びその他の職種に対する就職支援体制について資料を基に紹介した。
- ⑬ 第13回：スタッフ教員が担当し、教員としての資質能力を形成するために有効な機会となる本学部の臨床体験的プログラム（生雲小学校フレンドシップ事業あるいは学力向上支援事業等）について、Power Point等を使用して紹介した。

#### 4. 授業成果の分析と考察

現職教員が授業担当者としてこれほど多く関わった授業は、恐らく、本学部では初めてであろう。本授業の試みはいったいどのような結果を生み出したのだろうか。以下では、各授業終了時に提出された学生による「自己評価と感想」票、第1回授業と最終授業時に実施したアンケート結果等をもとに分析・考察を加える。

なお、「自己評価と感想」票の提出者は127名。アンケートの回答者数は、第1回が131名、第2回は123名であった。

##### (1) 授業の理解度等

###### A. アンケート結果から

第2回目アンケートでは、全授業を終えた時点での(1)「教職に関する理解」、(2)「教職の魅力ややりがい、使命の感得」、(3)「教職の仕事内容についての理解」および(4)「もっと勉強したいこと、取り組むべき課題の明確化」の度合いを①はい、②いいえ、③どちらとも言えないの三択で尋ねた。結果は表1の通りである。

表1. 教職への理解、魅力・やりがい等、仕事内容の理解、今後の課題

	教職の理解		魅力等		仕事内容		課題	
	人	%	人	%	人	%	人	%
① はい	117	95.1	114	92.7	109	88.6	96	78.0
② いいえ	2	1.6	4	3.3	2	1.6	3	2.5
③ どちらとも言えない	4	3.3	6	4.9	14	9.8	24	19.5

(%は小数点第2位を四捨五入)

「教職に関する理解」では「はい」と回答した学生が圧倒的に多く、123名中117名(95.1%)であり、「どちらとも言えない」が4名(3.3%)、「いいえ」が2名(1.6%)の順であった。

「仕事内容の理解」についても「はい」がもっとも多く、109名(88.6%)で、続いて「どちらとも」14名(9.8%)、「いいえ」2名(1.6%)であり、いずれも9割前後の学生が理解できたと回答している。

「教職の魅力等」についても「はい」という肯定的回答がもっとも多く、114名(92.7%)であり、「どちらとも」は6名(4.9%)、「いいえ」は4名(3.3%)であった。

多少異なる傾向を見せたのは「課題等」についてで、「はい」という回答が96名(78.0%)にとどまり、他の項目に比較すると10ポイント以上の差が出た。その分、「どちらとも」が24名(19.5%)と大きく増加し、「いいえ」は3名(2.5%)であった。

アンケート結果に限っては、本授業の目標である、「教職の魅力ややりがい、志向性を育成する」あるいは「基本的知識や認識を育てる」という目的は達成されたとみることができる。ただし、「もっと勉強したいこと、今後の課題の明確化」という点では、「いいえ」と「どちらとも言えない」が合わせて2割以上いることから、この面への指導を充実させることが求められる。

## B. 「振り返りシート」から

「振り返りシート」における自己評価では、①授業の内容が理解できたか、②興味を持って聞けたか、③教職の魅力や難しさが理解できたか、の3項目について、「はい」「どちらとも言えない」「いいえ」の選択肢から選ばせた。各回の結果は表2の通りである。(％のみ)

表2. 自己評価による授業の内容理解、興味、教職の魅力・困難の理解の度合い

	理 解			興 味			魅力・困難		
	はい	どちらとも	いいえ	はい	どちらとも	いいえ	はい	どちらとも	いいえ
第1回	89.8	9.4	0.8	96.9	1.6	1.6	83.6	16.4	0.0
第2回	79.4	19.8	0.8	73.0	25.4	2.4	81.0	17.5	0.8
第3回	88.8	11.2	0.0	90.0	8.0	1.6	90.4	7.2	2.4
第4回	95.9	4.1	0.0	97.6	2.4	0.0	98.4	1.6	0.0
第5回	97.5	2.5	0.0	95.8	3.4	0.8	98.3	1.7	0.0
第6回	90.8	9.0	0.8	86.9	12.3	0.8	92.6	6.6	0.8
第7回	81.4	17.7	0.9	78.8	18.6	2.7	68.1	24.8	7.1
第8回	95.0	5.0	0.0	98.3	0.8	0.8	95.8	4.2	0.0
第9回	96.5	3.5	0.0	99.1	0.9	0.0	98.3	1.7	0.0
第10回	93.2	6.8	0.0	96.6	3.4	0.0	93.2	5.9	0.8
第11回	97.5	2.5	0.0	99.2	0.8	0.0	96.6	3.4	0.0
第12回	95.7	3.4	0.9	88.8	10.3	0.9	93.1	6.0	0.9
第13回	99.2	0.8	0.0	97.5	1.7	0.8	96.7	2.5	0.8

(小数点第2位を四捨五入)

いずれの項目についてもほとんどの授業で「はい」が90%前後の高い数値を示したが、第2回及び第7回の授業に関してはやや低い数値となっている。①の「内容理解」では第2回は79.4%、第7回は81.4%であった。②の「興味」については第2回は73.0%、第7回は78.8%、③の「魅力や困難」に関しては第2回は81.0%、第7回は68.1%であった。その分、両授業とも「どちらとも言えない」を選択した学生の割合が他の授業に比べて多くなっている。

第2回目授業は「求められる教職の資質能力」と「本学部の教員養成カリキュラム」を授業内容としたが、題材が教養審答申だったこともあって内容的にとっつきにくく、したがって興味の点でも低くなった可能性がある。また、授業の感想からは、答申に示された「求められる資質能力」の多さに驚いたり、「示された資質能力が身につけられるか不安だ」といった記述も見られた。

第7回目授業はグループ・ディスカッションであったが、授業観察からディスカッションの活発さなどでグループ間にバラつきが見られ、そのことが反映している可能性がある。ただし、授業後の感想では、これまでの学習を振り返る機会となったり、他者の意見や考えを聞くことで刺激を受けた学生が少なくない。その意味では、授業のねらいはある程度達成されたと見ることができる。

## (2) 教師への志向性

## A. アンケート結果から

アンケートでは、2回とも「将来教員になりたいと思っているか」という設問を設定し、授業開始時と授業終了時で変化があるかを見た。結果は表3の通りである。

表3. 将来学校教師になりたいと思うか

	第 1 回		第 2 回	
	人	%	人	%
① とてもそう思う	79	60.3	69	56.1
② そう思う	29	22.1	32	26.0
③ どちらとも言えない	18	13.7	14	11.4
④ あまりそう思わない	5	3.8	4	3.3
⑤ まったくそう思わない	0	0.0	4	3.3

(%は小数点第2位を四捨五入)

「とてもそう思う」と「そう思う」を合わせて「教師になりたい」とする回答をしたのは、第1回目調査では合わせて82.4%であり、第2回目でも82.1%とほとんど変化はなかった。しかし、第1回目では「あまりそう思わない」(5名)および「まったくそう思わない」(0名)が合わせて3.8%であったのに対して、第2回目ではそれぞれ4名(各3.3%)が選択しており、合わせて6.6%と増加した。教職の魅力ややりがい、志向性を育成するという授業の第一の目標からすると多少不本意な結果と言えるかもしれない。

## B. 「振り返りシート」から

教職への志向性に関しては、「振り返りシート」においても「今までのシートのなりたい度を考慮しながら」そのつど「教員なりたい度」(100ポイント満点)の変化を記入させた。

第1回授業終了時から全授業終了時までの変化を見ると、初めと終わりで多少なりとも上昇したのは102名中55名(53.9%)、逆に下降したのは16名(15.7%)、変化しなかったのは31名(30.4%)であった。さらにこの内、20ポイント以上の変化があった学生だけを見ると、上昇は19名(18.6%)、下降は6名(5.9%)であった。なお、変化なしでは、初めも終わりも100ポイントという学生が25名(24.5%)いる。

傾向として、初めに80ポイント以上の高い数値を記入した学生は、「なりたい度」が上昇するかあまり変化がなく、下降してもその幅はさほど大きくない。最終的に100ポイントに上昇した学生も13名(12.7%)いる。特に初めに100ポイントと記入した学生にあっては、29名中25名と8割以上の者が100ポイントのままで、そのほとんどが絶えず100ポイントをキープしたままであった。

逆に、最初に50ポイント以下の低い数値を記入した学生を見てみると、合わせて10名いるが、その内、最終的に上昇した学生は6名、下降したのは1名のみであった。なお、初めから終わりまで1ポイントを記入した学生も1名いた。

以上の結果から考えると、「教職への志向性を育てる」という本授業のねらいは概ね達成で

きたと考えられる。

ところで、個々の学生の「なりたい度」の変動は大小様々であるが、大まかに見ると変動の大きかった学生の中に次のようなパターンが若干見られた。

- ① 第3回目の授業までにやや下降し、その後上昇して高い数値を維持するもの
- ② 第6回目までは比較的高い数値を示すが、第7～10回目でやや下降するもの
- ③ 上記①と②の両方の傾向をあらわすもの

こうしたパターンが出る要因については、授業の影響以外のものも考えられるので、各回の感想等と突き合わせて、さらに細かな分析が必要である。

\*シート提出者全128名中、最終回未記入者22名は除外。

### (3) 教職のイメージ

アンケートでは教職のイメージについて、次のような設問と選択肢を設定し、1番目、2番目、3番目までと順位をつけて回答させた。

【設問】「あなたは学校教師に対してどんなイメージを持っていますか。」

【選択肢】 ①しんどい仕事 ②やりがいのある仕事 ③楽しい仕事 ④つまらない仕事 ⑤楽な仕事 ⑥一生をかけられる仕事 ⑦身分の安定した仕事 ⑧その他

第1位にあげられたものだけを見ると、第1回目でもっとも多かったのは②「やりがいのある仕事」で131名中85名(64.9%)であり、続いて①「しんどい仕事」と③「楽しい仕事」が同数の12名(9.2%)、さらに⑥「一生をかけられる仕事」の11名(8.4%)と続く。

第2回目調査でもっとも多かったのは、やはり②「やりがいのある仕事」で123名中77名(62.6%)、続いて⑥「一生をかけられる」の14名(11.4%)、③「楽しい」の11名(8.9%)、①「しんどい」の10名(8.1%)の順であった。なお、④「つまらない仕事」と⑤「楽な仕事」は1、2回目とも1番目で回答した者は0名であった。

もっとも多かったのは「やりがいのある仕事」であり、第2位、第3位に上げた学生も含めると第1回、第2回ともに、実に9割の学生が選択している。「楽しい」や「一生をかけられる」も4～6割の回答があるが、他方、「しんどい」もほぼ5割を超える回答があり、教職の魅力ややりがいを感じていると同時に、その困難さもある程度認識している学生が多いと考えられる。

なお、⑧「その他」の回答では、以下のようなものがあつた。

第 1 回 目	第 2 回 目
・責任がある仕事	・自分自身も成長し続ける仕事
・給料が安定している(仕事)	・人の温かさを感じられる仕事
・学べる仕事	・子供と一番に触れ合える仕事
・人を人として正しく育てる仕事	・子供と触れ合える仕事
・自分を生かせる仕事	・いやな奴はいやな先生
・思いやりのある仕事	
・飽きない(仕事)	

**(4) 教師の適正についての自己診断**

自分が教師に向いているかをアンケートでは聞いてみた。  
結果は表4の通りである。

**表4. 教師に向いているか**

	第1回		第2回	
	人	%	人	%
① おおいにそう思う	8	6.1	5	4.1
② だいたいそう思う	54	41.2	37	30.1
③ どちらとも言えない	54	41.2	56	45.5
④ あまりそう思わない	12	9.2	17	13.8
⑤ まったくそう思わない	2	1.5	4	3.3
⑥ 無回答	1	0.8	4	3.3

(%は小数点第2位を四捨五入)

第1回目調査では、「おおいにそう思う」「だいたいそう思う」が合わせて62名、47.3%、「どちらとも言えない」が54名、41.2%、「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」が合わせて14名、10.7%となっている。第2回目では、「おおいにそう思う」「そう思う」は42名、34.2%に減少したのに対して「どちらとも」が56名、45.5%と微増している。「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」は21名、17.1%とこれも7ポイントほど増加している。

教師になりたいと考えている学生が80%を超える数値であったことを考えると、教師に向いているか否かに関してはかなり控えめな自己診断と思われるが、先の「教師のイメージ」等と関連付けて見るならば、必ずしもそうとは言えないようである。

課題は、半数近くいる「どちらとも言えない」という学生に、いかにして自信を付けさせていくかということになる。

**(5) 授業の満足度**

第2回目アンケートでは、最後に本授業に対する満足度を尋ねた。

結果は表5の通りである。

**表5. 授業の満足度**

「とても満足している」の44名(35.8%)と「だいたい満足している」55名(44.7%)を合わせると、99名(80.5%)と8割近くの学生が肯定的に評価している。それに対して「あまり満足していない」(6名、4.9%)、「まったく満足していない」(2名、1.6%)を合わせると、8名(6.5%)と1割に満たなかった。「どちらとも」は12名(9.8%)であった。

満足という点では、本授業は概ね肯定的に評価されたと言える。しかし、1割未満とは言え、満足していない学生がいること、

	人	%
① とても満足している	44	35.8
② だいたい満足している	55	44.7
③ どちらとも言えない	12	9.8
④ あまり満足していない	6	4.9
⑤ まったく満足していない	2	1.6
⑥ 無回答	4	3.3

(%は小数点第2位を四捨五入)



「どちらとも言えない」も1割ほどいることなどを考えた場合、かれらが教職を志望しているか否かにかかわらず、内容的に納得のいく授業を構想する面でやや不十分であったと思われる。

## 5. まとめ

本授業では、教職の魅力ややりがい、あるいは使命感等の育成を第1の目標においた。そのため、学内・外から講師として招いた現職教員たちにもその旨を伝え、現場が抱える困難等については控えめに話してもらうようにした。それは、受講生の大半が1年生であり、入学直後に初めて受講する授業ということもあって、かれらの多くが持っているであろう教職への意欲をそぐことはできるだけ避けたいという考えからである。アンケートあるいは「振り返りシート」の諸結果を見る限りでは、ねらいは達成されたということができる。

また、教職の実際の姿を理解させ、教職への意欲をさらに喚起するために多くの学内・外の現職教員を授業担当者として招いて、実践に即した内容を構成すること、ディスカッションや座談会などの学生参加型学習をできるだけ多く取り入れるという点について見ると、これもまた効果的であったと言える。それらに該当する授業（第4～10回）に関して「振り返りシート」および「自己評価と感想」の結果や記述を見ると、肯定的な評価・記述が多く見られたからである。たとえば、「自己評価」の授業内容の理解、授業への興味、教職の魅力・困難の理解において、「はい」という回答がいずれも高い数値を示している。ただ、第7回授業のみ違った結果が出ているが、分析の項で触れたことに加えて初めてのディスカッションであること、運営担当者のミスにより進行係に進行メモを渡していなかったといった特殊事情のもあったためと思われる。

総じていえば、本授業は十分に目標を達成できたと評価できる。ただし、当然のことながら、細かく見れば、本授業には検討・改善すべき点多々ある。そのいくつかを挙げておく。

第1は、アンケートにおける「もっと勉強したいこと、今後の課題などが明確になったか」の設問で、「いいえ」と「どちらとも言えない」が合わせて22%と2割ほどおり、前述したように、これらの回答をした学生たちにどのような手だてを施すのかが課題である。今回はできなかったが、「振り返りシート」あるいは「個人カルテ」を活用した個人指導、各授業毎に提出される「自己評価・感想」票を基に、適宜個別的あるいは集団的に、必要な手だてを施していけるような指導のフィードバック体制を構築するといったことが考えられなければならない。

第2は、「教職への志向」に見られる微妙なズレである。アンケートでは「将来教師になりたいか」という設問に対して、第1回目と比べて第2回目では「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」が3.8%から6.6%へと微増している。また、「振り返りシート」における「教員になりたい度」でも、第1回と最終回を比較した場合に、「なりた度」が下降した者は16名で、その内、20ポイント以上下降した者が6名いる。もとより、教職への志向性の変化をもたらす要因は種々あり、本授業のみの影響とは言えないが、上述の個人指導やフィードバックの体制を整えることで、また違った結果も期待できる。

第3は、「教職の適性の自己診断」に関する問題である。すでに見たように、アンケートで教員になりたいと回答した者は第1回、第2回目ともに80%を超えた。しかし、「適性」については「おおいにそう思う」、「だいたいそう思う」を合わせた肯定的評価は、第1回目の47.3%から第2回目では34.2%とかなり下降している。対して「どちらとも言えない」が41.2%から45.5%へ、「あまりそう思わない」と「まったくそう思わない」という否定的回答は10.7%から17.1%へと増加している。もちろん、これも本授業の影響だけとは言えない。ま

た、初めのうちは漠然としたイメージや理解から「なんとなくできそうだ」と考えていた学生たちが、実際的な内容に触れ、理解を深める中で認識を改めた結果であると考えられる。つまり、授業内容の理解、教職に対する理解の深化の現れであると捉えうるならば、必ずしも本授業の効果を低めるものにはならない。しかし、そうは言っても、「どちらとも言えない」と自信のなさを見せる学生、否定的評価に転じていく学生たちに対しては、何らかのフォローができる体制が必要である。

以上のような諸点を考えたとき、本学部がこれから始める「ちゃぶ台方式」という「教員養成GP」の取り組みに大きな期待がかかる。

ところで、本稿では取り上げなかったが、数値などに表れない問題・課題もある。

1つは、第2、3回目授業のように講義型で「教員の資質能力」あるいは「子ども、教育現場の実態」といった教育活動そのものからは少し距離をおいた内容を取り扱う場合、内容理解の難しさや用語の難しさ・とっつきにくさ、各種データの読みとり方の難しさなどを感想で記述している学生が一定程度存在するという点である。そのことが、授業に対する興味や教職の魅力・やりがいを感じ取ることに困難を生じさせた感は否めない。1年前期という時期にふさわしい説明の仕方や学習方法、適切な時期の究明が必要である。

2つ目に、学内・外の現職教員を授業担当として採用する場合の事前の打ち合わせの問題がある。今回は、授業運営プロジェクトの発足が本年3月と極めて遅かったために、全般的に準備不足の面が多々ある。現職教員との事前打ち合わせ等も十分であったとは言い難い。そのため、2回にわたる座談会では、進行方法についても、また、会話の活発さにおいてもグループにバラツキや濃淡が見られた。このことが、若干の学生において、該当授業日（第8、9回）の「教員なりたい度」の下降傾向を生んだ可能性もある。学外講師を招く場合などは、授業の目的・ねらいおよびそれに即した内容構成などの面で事前の十分な準備・打ち合わせを徹底する必要がある。

第3として、第7回の授業に現れた自己評価の低さの問題がある。前述したように、慣れていない、進行メモがなかったなどといったことが原因として考えられる。しかし、それよりもむしろ、ディスカッションに向けての動機づけという面が不足していたことが第7回授業に対する学生の「自己評価」の低さに表れた可能性もある。自分がどのような視線でディスカッションに望むのか、目的意識や意欲をいかに確かなものとしていくか、そのより有効で具体的な手だてが考えられなければならない。

以上、2回にわたるアンケートおよび「振り返りシート」の分析から考えられる成果と問題ないし課題について述べてきた。当然のことながら、叙述してきた諸点は本授業だけで決定づけられるものではなく、この後に続いていく各種専門の授業、教育実習等によって今後も多様にそして大きく変化するはずである。今回の「教職概論」（養成系学生クラス）の授業では、そうした後の専門授業との関連や連続性についてはほとんど検討を加えていない。それは、われわれプロジェクトには手に余る課題であり、カリキュラムの再構成、指導方法の改善等も含めて、今後学部全体で考えていくべき問題である。